

# 数理の窓

## アンナ・カレーニナと環境適応 —他人の不幸からは学べない?!—

「幸せな家庭はどれも似通っているが、不幸な家庭はそれぞれの形がある」—トルストイの名作「アンナ・カレーニナ」の冒頭部分にちなんで名付けられた「アンナ・カレーニナの原則」は、米国の進化生物学者ジャレド・ダイヤモンド氏が野生動物の家畜化を例に、環境適応の条件についても同様のことが言えるとして擬えたものである。すなわち、家畜化に成功した動物の特徴はどれも似通っているが、家畜化に失敗した動物にはそれぞれの形（個別性）があるという。同氏によると家畜化に成功した動物だけを観察してもその成功の条件は見出しにくい。失敗した動物の個別性—例えばコアラなら餌の好み、シマウマなら荒い気質—を観察することにより人間との生活への適応過程における餌の効率性、成長速度、繁殖容易性、気質等が顕著になっていくということだ。言い換えると、環境適応に成功した動物より失敗した動物を観察することにより環境適応に必要な条件がより明確になるということだろう。

ダイヤモンド氏を発端として、動植物の環境適応において言及されることが多くなったアンナ・カレーニナ原則だが、企業の環境適応の観察においても同様の原則が成立すると考える研究者がいる。英国レスター大学アレクサンダー・ゴープン教授は金融市場の環境ストレスの下で破綻の方向へ向かった

企業株価の研究を通じ、企業の環境適応のパターンには共通性があると報告している。すなわち、市場の安定性が崩れるに従い企業株価の相関性が高くなり破綻の直前では逆に個別性が高くなるというのである。そしてこのような共通パターンの裏には大きなシステム論的な仕組みが存在している。企業が環境ストレスに適応する際には既存の余剰リソースを使ってストレスを吸収するが、ストレスが高まり組織としての適応力に余裕がなくなると個々の企業特有の事情により破綻するというのである。

このモデルに基づけば相関性の動向から将来の破綻の予測が可能になることも示唆されるが、一方で破綻に到る企業の特徴を教えてくれるものではない点には注意が必要である。なぜならアンナ・カレーニナ原則の下「破綻する企業はそれぞれの形がある」からである。破綻の形が本質的な破綻の理由とは限らないのである。昨今、破綻した企業の理由として企業文化を挙げる議論が多いが、本質的な理由なのか単なる最後の「形」に過ぎないのを見極めないと他社の参考にならない。

小説のアンナは残念なことに悲しい結末を迎えてしまう。人は彼女の幸せへの適応に失敗した理由を理解することで自分の幸せに向けた条件を模索しようとするだろうが、自分の人生の糧としていくのは実は難しいのかもしれない。（鈴木 枝理子）